

第14回高知市総合教育会議 議事録（概要版）

- 1 日 時 令和3年7月27日(火)
開会：午後2時30分 閉会：午後4時00分
- 2 開催場所 オーテピア高知図書館 4階 研修室
- 3 出席者
- (構成員) 高知市長 岡崎 誠也
高知市教育委員会 教育長 山本 正篤
委 員 谷 智子
委 員 西森 やよい
委 員 野並 誠二
委 員 森田 美佐
- (市長事務部局)
- 高知市副市長 中澤 慎二
高知市副市長 松島 研
総務部部長 橋本 和明
総務部副部長 谷脇 由人
- (教育委員会事務局)
- 教育次長 溝渕 隆彦
教育次長 岩原 圭祐
教育政策課長 島内 裕史
教育政策課長補佐 島崎 由紀子
教育政策課総務担当係長 神岡 純子
学校教育課長 山中 浩介
学校教育課副参事 竹内 清貴
学校教育課学力向上指導主幹 森田 やよい
学校環境整備課長 高橋 直人
学校環境整備課GIGAスクール統括監 市原 俊和
学校環境整備課長補佐 高橋 慎治
学校環境整備課情報整備担当係長 中山 智広
学校環境整備課指導主事 高畑 将樹
教育研究所長 近森 夏彦

- 4 議 題
- (1) G I G Aスクールの進捗状況
 - (2) 高知市の不登校対策
 - (3) 高知市における学力向上の取組

5 議事の経過

- G I G Aスクールの進捗状況について，教育委員会事務局から【G I G Aスクールの進捗状況】及び【資料1】～【資料7】に沿って説明。実際にタブレット端末を各委員に配布し，デジタルドリルの説明を実施。

- 議論

(谷委員)

タブレット端末での学習を実際に体験してみて，非常に面白いと感じた。これからデジタル化は進んでいくが，子どもたちと直接関りあいながら進めていくこれまでのアナログ的な教育もとても重要なので，デジタルとアナログが融合した教育ができれば良いと感じた。年配の先生方にはデジタル化は敬遠されがちだが，実際に使用してみると面白いものなので，年配の先生方と若い先生方が一緒になり，これまでの教育の大事なところも大切にしながら，デジタル化を推進していくことが大切だと思う。

次に，【資料7】で2026年を目標に新しい学びのスタイルへ変えていこうとしているが，「教員主導から子ども主導へ」と書かれており，大変しみな取組だと感じている。

(学校環境整備課 市原G I G Aスクール統括監)

デジタルとアナログのベストミックスが，これからは大事になると考えている。ベテランの先生がうまくICTを活用すると非常に分かりやすい授業になるので，若手の先生と一緒にデジタル化を進めていきたい。

また，【資料7】にあるとおり，デジタル化によって教員主導から子ども主導へと，新しいフェーズに変わっていくので，教育委員会としても最大限バックアップしていきたい。

(西森委員)

4点質問がある。まず，【資料6】のオンライン研修についてだが，オンライン研修の実施について決まっていることがあれば教えていただきたい。2点目に，【資料7】で「教員主導から子ども主導へ」と打ち出しているのはすごい覚悟だと感じた。これは，高知市独自の方針か，全国的な流れなのか。また，子ども主導としたときに，子どもたちと先生の関係性をどういったものにするのかがとても大切だと考えるが，そこをどのように考えているのか。3点目に，文字の「とめ・はね・はらい」等もタブレットで教えることができるようになるなど，デジタル化が進む中で，これまでの教育の何を残していくべきと考えているのか。最後に，一部の学校では，授業で習っていない漢字や英語の

文法を使ってはいけないと指導していると聞いたことがあるが、そういった決まりになっているのか。また、関連して【資料2】に「すべての学年の問題が利用可能」とあるが、この無段階学習についてはどういった考えを持っているのか。

(学校環境整備課 市原GIGAスクール統括監)

1点目については、昨年度から研修だけでなく学校内の生徒会や終業式もオンラインで実施する学校も増えてきているので、今後も推進していきたい。2点目については、1人1台タブレット端末があるということは、これまでの教師のためのICTから、子ども一人一人のためのICTへと位置付けが変わってきていると考えている。今後ますます授業の形式や学びの形が変わっていく中で、教師はファシリテーターとしての能力が必要になると考えている。3点目については、デジタル化が進んでも紙と鉛筆は無くないと思う。一方で、画面上での問いに答える速さや力も求められているので、バランスよく進めていきたいと考えている。最後の4点目については、習っていないことを使ってはいけないということはもつてのほかである。子どもたちの能力に応じ最適化された学習が今後は必要である。

(岡崎市長)

今の子どもたちは、インターネットが普及したことで多くの情報を得ることができているので、学校で教えられていないから使ってはいけないということは通用しない。今後は、子どもの方が先行する分野も出てくるかもしれない。

- 高知市の不登校対策について、教育委員会事務局から教育研究所作成資料に沿って説明。

(野並委員)

資料9ページにある「心の居場所」という言葉が非常に良いと感じた。体の居場所とは別に、心を癒す場所があれば、あきらめずに頑張ることができると思うので、とても良い取組である。

また、「こうでなければならぬ」ということは何もないので、そこに早く気付かせてあげることとても大切なことではないかと思う。自信を持てることが一つであれば、次につながることもある。そういうものが早く見つかるきっかけづくりをすることが重要である。

(森田委員)

全教員がチームとなり不登校児童の状況を見えるようにしていることや、ICTを使って別の教室で授業を受けられるようにしていることは、大変すばらしい取組である。不登校児童が、自分自身で1日の行動を計画し実践することも、一つの主体性と考えることが

できる。

また、これからはいろいろな国籍や性の在り方が違う生徒もいる中で、資料 14 ページにあるように特別支援教育の考え方が基盤となって共生の概念が広がっていくのではないかと考えている。

(岡崎市長)

北九州市でホームレスの支援をしている特定非営利活動法人ホームレス支援全国ネットワークの奥田知志さんは、「ホームレスの支援はハウスの提供ではなく、ホームの提供が必要。心のつながりが自立へとつながる。」と仰っている。子どもたちも同じであり、心のつながりを感じられる心の居場所づくりが必要なのだと感じている。

(谷委員)

友人とのつながりなど、心の居場所が教室にあれば子どもは教室に向かうので、とても大事な考え方である。不登校は子どもの心のつながりの問題なので、教育研究所が作成した冊子「不登校支援ハンドブック」にあるとおり、不登校児童を出さないための予防的な視点として、各学校が魅力ある学校づくりをしていくことが必要である。我々教員も、子どもたちとの心のつながりについて考えていかなければならないと思う。

(西森委員)

これまでは、小学校・中学校・高校・大学・就職というルートを通らなければいけないという考えがあったのかもしれないが、今は若くして起業したり、スポーツに力を入れるため通信制の学校を選択したりと学校というものの考え方が多様化してきている。学習の個別最適化が進む中で、そもそもなぜ学校に行かなければならないのかという基本的なことを、一度正面から議論してみる必要もあるのではないかと感じた。

- 高知市における学力向上の取組について、教育委員会事務局から学校教育課作成資料に沿って説明。

(山本教育長)

令和 2 年度は、県からの指導主事の派遣を受け、延べ 1,700 回にわたる学校訪問を実施し、学校での授業研究等様々なことを一緒に進めてきた。学力の面での成果はまだ現れていないが、毎年 100 名程度の教員の入れ替わりがある中で、市の授業力を維持できていることは一定の成果と考えている。今後もこの取組を続けていき、ベテラン教員の教え方を学校の中で研究することで若手教員にも伝えていく。

また、GIGA スクール構想の中でのタブレットを活用した新しい授業形式についても、研究を進めながら学校と連携し新たな取組を実施していくことで、子どもたちの興味を引き出しながら学力向上を図っていく。

(岡崎市長)

I C Tの導入が進んだとはいえ、学校の先生方のスキルの引き継ぎは難しいと思われる。若い先生方が増えている中で、ベテランの先生方のスキルをどう引き継いでいくのかが課題ではないか。また、教科によっても先生の偏りはあるのか。

(山本教育長)

資料2 ページに記載しているが、指導主事の担当科目は国語、算数、英語であり、理科や社会には割り当てられていない状況である。理科や社会の授業についても引継ぎは大切であると認識しており、指導的な役割の先生方の配置については今後の課題であると考えている。

(谷委員)

自校採点の結果ではあるが、全国学力・学習状況調査の採点結果が県に近づきつつあることは大変良いことである。

訪問指導の充実ということで、年間 1,700 回の学校訪問を実施しているが、授業改善などの指導だけではなく、先生方が元気になるような学校訪問を検討し実施してもらいたい。

(西森委員)

最近、指導されながら学ぶこととは別の、見て学ぶことの大切さを感じている。ベテランの先生の授業ではこんなにも子どもの反応が違うのかということを見て学ぶことが大切だと思う。実際に行われている指導とはどういった形式で行われているのか。

(学校教育課 森田主幹)

実際に学校に行って授業を参観し指導・助言することと、モデルとなる提案授業を講座の中で参観し、学んでもらうものがある。今後も、良い授業をする先生の授業を残していくことを続けていく。

(西森委員)

狭義の学力と広義の学力についてそれぞれ考える必要がある。授業科目ごとの狭義の学力を考えたときは、I C Tの活用は大変大事なことである。しかし一方で、タブレットで正解の効果音が鳴ると先生に直接褒められるのでは、子どものやる気に大きな違いが出るので、先生にしかできないアナログな力が重要になってくる。デジタルとアナログの双方の使い分けが大切になる。

広義の学力を考えたときには、受験のための学力ではなく、将来どうしたいのか、何になりたいのかなど、一歩先を見せることも教育の役割として大切なことではないかと思う。I C Tを活用して、教室で普段会えない遠い地域の人のお話を聞くことや、普段見えないも

のを遠隔操作によって見るなど，将来どういったものが待ち受けているのかを体験させることも長い目で見たときには重要になる。

- 閉会